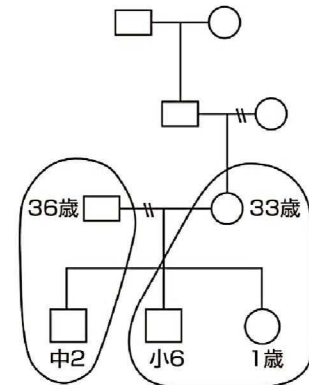


## 頻回に住所が変わるケース

他県から転入してきたケース、前住所地の福祉事務所から支援の継続を依頼する連絡が来た。母親は片付けができないために家はゴミがたまって、子どもの発育も悪い状況だった。生活保護を受給しているが、保護費を受け取るとすぐに使ってしまう、借金もある。父親（夫、38歳）とは離婚し、第1子（男、中学2年）は父親と一緒に暮らすことを選択した。現在は3人家族である。



母親は生活保護費の受給日には受け取りに来るが、しばらくすると子どもを連れて他県の母親の父親（祖父）のところや他県の元夫のところに行っていて、月の半分くらいは家からいなくなる。次男も学校を休ませて連れて行く。次男も学校に行きたいと言うことはないようで、学校もスクールソーシャルワーカーがよく訪問して声かけとかしている。前の住所地でも学校は休みがちで友達もできないし、学力的にもついて行けなくなっている。第3子の保育園とは連絡が取れていて、登園してこない時には保健師に連絡をするようお願いしている。

第2子の熱が出たときに、病院に連れて行くためのタクシー代がないと言って受診させなかった。第3子は1歳であり母親が自転車で医療機関まで連れて行けるが、中学生の第2子を受診させるためにはタクシーを使う必要がある。生活保護費を月の前半で使い切ってしまう母親で、そのお金がないという。何に使うかと聞くと「買いだめしている」と言う。「食料はあるけん大丈夫」ともいう、米やラーメンなどを買いだめをしているらしい。母親が家で味噌汁を作っている感じはない、ご飯は炊けるのでおかずはレトルト食品を買ってきて食べていると思う。保健師だけではなく相談員とか、いろいろな職員がそれぞれの関わりを持つ中で助言指導している。

こっちが実際に行って、アイスノンを使ってとか指導したりとか、子どもさん、ハアハア言いながら寝ているという感じで。「吐くから」って、びっくりして電話してくるんですけど、行くところまでではない感じで。だからこのお母さん、こういう子どもたちを育てるって言うのがすごく不安で。やっと関係ができて、その中で、いろいろな生活費の話をして、ポロポロ借金をしていたことを話し出して。・・・おかゆも初めて炊いたとか言っているんです。

暑い時期だったが、母親から夜「熱がある、具合が悪い」と電話があって、保健師2人で家に訪問した。一つの部屋に暑いのに毛布を引いて、毛布の中にお兄ちゃん（第2子）を寝かして、下の子（第3子）は吐くからというが何もしていないって感じだった。熱は測れるので、熱があると保健師に電話してきた。母親に「洗面器とかね、吐くときはこうした方がいいよ」、そういうことから教えてあげないといけない。第3子は吐いていたのに母親は自分が炊いたおかゆをたべさせようとした。「ちょっと控えようね」って教えるという感じ。食品についてくる保冷剤とかもなく、「冷えピタ」あれだけ一つあった。母親は、子どもの熱が出た時に、どのようにして冷やすのか、熱を下げる方法を知らないし、能力もない。夜遅かったので、今晚はこのまま熱を下げる処置をして、冷やし方のポイントを保健師が具体的にやって見せて教えた。翌朝、生活保護担当と連携して病院と一緒にいった。

(母親は) おかゆを炊いたことを一生懸命もってきて見せたかったのは、褒めてもらいたかったかなと思ったんですよね。自分が今日したよっていうのをですね。一生懸命したいという気持ちはね、認めてあげているから、今、保健師と訪問の指導員、今度から社会福祉士がはいったんですけど、よく関係作ってくれているので。ここに(役所)にきたときも「こんにちは」とか言ってくるんです。なんかね、憎みどころがないっていうお母さんなんです。なんか、聞いていた話とまた違って、なんか可愛いって感じがするんですね。

第3子の1歳6ヶ月児健診は受診した。予防接種は開業医に依頼し保健師が日程を調整して約束するが、予防接種の日に連絡をせずに他県に行ってしまう。前の日に保健師が念のためにとまって電話をするが通じない、やっと通じたと思ったら、もう過ぎてしまったということで開業医にまたお願いする。いい医師だからどうかできています。まだ終わっていない予防接種もある。保健師が必死でかかわっている。母親は予定外のこと、子どもが病気するなどが起こると対応できない。

母親の精神科の治療は生活保護を受ける条件として保護課で説明されているので、きちんと受診している。母親はお金があると使ってしまうので、今は電気代とか必要なものを払っていけるように教えている。誰かが近くで支援をすると生活できると思うが、母親は病気があるので対応がうまくいかないトラブルになる。前の住所地でトラブルが多かったのはその対応が上手に行かなくて手を焼いていたと思う。ここに知り合いがいるわけでもなく引っ越してきているので、初めは今の住所に1年いるとは思えなかった。

こういうのは身内の方がいらっしゃれば、すごく支えられて、お母さんも安心できるし、ただこういうお母さんだからトラブルも多いのかなと思うんですね。だから、病気を理解して上手に対応されたら、良いものを持っているお母さんなんです、話していると。だから褒めたりとか、わかってあげると喜んで、必ず窓口にはよって、来るときには寄ってくれたりするんですけど、そこができないから、つついもう、パーってしたりとか短絡的になるのかなと。

第2子はおとなしい子で、母親は同じレベルで兄弟げんかみたいによく喧嘩をする。母親が県外の祖父のところに行くときには学校を休んでついて行く。前のところでも小学校は休みがちで、学力は小学校低学年ぐらいであるが、普通学級に在籍している。学校にあまり行っていないから、第2子の学力について学校は判断がつかないと思う。第2子はすぐに具合が悪くなって学校を休む。

学校にももう少し行けるようになったらと思うんですけど、すぐ発熱したりとか、やっぱり体力がないのかもしれないのかなとも思うんですけど。やっぱり、きちっとね、看護もしてないと思いますけど、今度行ってみて、いろんなことがわかってきたんですよ。

熱が出た時の手当や寝る場所の判断が出来ないなど、実際に行ってみてわかることが多かった。母親の両親が離婚して父方の祖母に育てられたという生育歴とも関係していると考えられる。日々の生活や子育ての細かいことを一つ一つ一緒にやりながらその場で教えることが必要とわかった。教えると「あ、そうね」と実行する。

感想：おかゆの作り方、子どもに熱がある時の体温の下げ方など日々の生活で不足していることを一つ一

つやってみせながら教えている。役場の窓口で対応しているだけでは見えてこなかった生活の問題が家庭訪問によってわかり、きめ細かな支援を行っている。

保健師が支援を続ける中で母親と気持ちが通じるようになり、母親も保健師を頼りにしている。

(小笹)